

保育実習中の学生の乳児保育体験に関する研究

小 屋 美 香*

A Study Concerning Infant Care Experience of Students in Nursery Practical Training

Mika Koya

Abstract

As seen in revision content of the Day Nursery Guidelines, nursery teachers are required not only for child-care, but also for support to families raising children; their advancement of qualification and high specialty are required more than ever. Approach in coursework aiming at integration of the theory and practice is made at training schools for nursery teachers. And for students who have not had actual relationship with infants in current society of fewer children, meaning and idea of the nursery training are very important on the grounds that they provide opportunity to students for directly relating with young children under 3 years old. This study therefore primarily purposed to illustrate the actual condition including how much and what kind of infant-care experience the students of nursery teacher training course have in nursery practical training at day care centers. Aimed at Nursery Practical Training I this time, this study embodied substance of the experience, and conducted analysis and inspection on especially formidable experience among discoveries of each student after those experience.

Keywords: nursery training, day care, infant care, infants, children under 3 years old

キーワード: 保育実習, 保育, 乳児保育, 乳児, 3歳未満児

1. はじめに

1) 乳児保育の視点から見た保育所保育指針の改定のポイント

保育所の役割の重要性を示している児童福祉施設最低基準の第三十五条の「保育の内容」には、これまで「保育所における保育の内容は、健康状態の観察、服装等の異常の有無についての検査、

自由遊び及び昼寝のほか、第十二条第一項目に規定する健康診断を含むものとする」となっており、保育所の実態とはかけ離れた内容になっていた。しかし、この第三十五条が、平成21年4月1日施行の保育所保育指針の告示化に伴い、「保育所における保育は、養護及び教育を一体的に行うことをその特性とし、その内容については、厚生労働大臣が、これを定める」と改正された。今回の改定

* 育英短期大学保育学科

では、総則に「子ども一人一人を権利の主体者とする」ことを色濃く示す中で、かけがえの無い存在として子どもの人権の尊重が強く打ち出されている。

また、今回の指針の「発達過程」では「何歳児」という言葉は使われておらず、「おおむね何歳」という表記に改められた。この「おおむね」という表現には、発達の個人差や生育環境による違い、また子どもの育つ姿は、行きつ戻りつしながら進んでいくため、おおよその姿で捉えるという意味が含まれていると考えられる。第二章の「子どもの発達」に、この「発達過程」が示されたことで、「発達の連続性」に対する深い理解が求められているといえよう。

平成2年施行の指針から、「指導」という言葉も極減し、「援助」という言葉が変わった。今回の指針においても、保育者の専門性が強調され、「専門的知識」、「技術」及び「判断」という表現が使われている。保育の場面においても、保護者との対応の中でも、相手の状況を感じ取りながら何を伝えていくのか、その的確な判断ができる保育士としての高い専門性が望まれている。

新指針では、「保護者に対する支援」という章が改めて設けられた(第六章)。総則の「2 保育所の役割」として「(三) 保育所は、入所する子どもを保育するとともに、……入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援等を行う役割を担うものである」とあり、また「(四) 保育所における保育士は、……子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである」としている。子どもの育ちを支えると同時に、保護者の子育てを支えていくことが従来よりも強調された形となっている。これまで以上に、保育士に求められることは多く、資質の向上及び専門性の向上を図るよう努める必要性についても第七章(職員の資質向上)で述べられている。

更に改定の大きな特徴の一つとして、旧指針の

第三章から第十章まで発達過程ごとに示されていた「保育の内容」すべてが、今回は第三章の中に盛り込まれたことがあげられる。保育所は、0歳から6歳までと年齢の幅が広く、また様々な背景をもつ子どもたちが生活している場である。そこで、保育に関わる全般的な配慮事項(一)をまず示し、発達過程を尊重し、乳児保育に関わる配慮事項(二)、三歳未満児の保育に関わる配慮事項(三)、三歳以上児の保育に関わる配慮事項(四)と整理して示されたことは大きなポイントである。

乳児保育は、保育所保育の原点ともいえる。特に乳児期は著しい発育発達が見られ、保育士等がどのように関わり保育をしていくかが子どもたちの育ちにも大きく影響を及ぼすため、今回の指針において配慮事項が「乳児」について分けて明記されたことは注目すべき点である。

2) 保育士養成課程における「乳児保育」の課題

急激な少子化が進み子どもの数は減少しているにも関わらず、乳児の保育に対する需要はますます増大している。また、家庭で子育てをしている親にとっても、特に子育て不安が大きい乳児期の子育て支援事業は全国各地で切望され、多くの親の支えとなっている。このような社会的な期待の高まりや制度的な改変に応じて、保育士養成課程の中での「乳児保育」に課されている内容も大きく膨らみつつある。

特に0歳から2歳児の保育は、生活上の養護が大きな部分を占めている。目覚しい発育発達が見られる時期で、食事(栄養)・排泄・睡眠・衣類の着脱・身の回りを清潔にする等、基本的な生活の世話を保育者が丁寧にいき、やがて自立に向けて育てていく時期である。「乳児保育」は、産休明けの乳児から3歳未満の低年齢児の特徴を理解して、適切な養護・保育の方法を修得することがその重要な内容である。また言葉が未発達な乳児と関わる際には、生理的欲求も含めて、思いを感じ

取って適切な対応をすることが求められる。愛情深い応答や関わりによって、人への基本的信頼感が形成されるなど、この時期に最も大切なのは子どもと大人の共感関係であるのかもしれない。

他にも乳児及び3歳未満児を保育する際には、配慮すべき点が多くある。前述した保育所保育指針、第三章「保育の内容」の「2 保育の実施上の配慮事項」から(二)乳児保育に関する部分と(三)三歳未満児の保育に関する部分について、抜粋して以下に記す。

(二) 乳児保育に関わる配慮事項

- ア 乳児は疾病への抵抗力が弱く、心身の機能の未熟さに伴う疾病の発生が多いことから、一人一人の発育及び発達状態や健康状態についての適切な判断に基づく保健的な対応を行うこと。
- イ 一人一人の子どもの生育歴の違いに配慮しつつ、欲求を適切に満たし、特定の保育士が応答的に関わるように努めること。
- ウ 乳児保育に関わる職員間の連携や嘱託医との連携を図り、第五章（健康及び安全）に示された事項を踏まえ、適切に対応すること。栄養士及び看護師等が配置されている場合は、その専門性を生かした対応を図ること。
- エ 保護者との信頼関係を築きながら保育を進めるとともに、保護者からの相談に応じ、保護者への支援に努めていくこと。
- オ 担当の保育士が替わる場合には、子どものこれまでの経験や発達過程に留意し、職員間で協力して対応すること。

(三) 三歳未満児の保育に関わる配慮事項

- ア 特に感染症にかかりやすい時期であるので、体の状態、機嫌、食欲などの日常の状態の観察を十分に行うとともに、適切な判断に基づく保健的な対応を心がけること。
- イ 食事、排泄、睡眠、衣類の着脱、身の回りを清潔にするなど、生活に必要な基本的な習慣については、一人一人の状態に応じ、落ち着いた雰囲気の中で行うようにし、子どもが自分でしようとする気持ちを尊重すること。
- ウ 探索活動が十分できるように、事故防止に努めながら活動しやすい環境を整え、全身を使

- う遊びなど様々な遊びを取り入れること。
- エ 子どもの自我の育ちを見守り、その気持ちを受け止めるとともに、保育士等が仲立ちとなって、友達の気持ちや友達との関わり方を丁寧に伝えていくこと。
- オ 情緒の安定を図りながら、子どもの自発的な活動を促していくこと。
- カ 担当の保育士が替わる場合には、子どものこれまでの経験や発達過程に留意し、職員間で協力して対応すること。

上記の配慮事項に関する内容からも3歳以上児とはまた違った、低年齢児ゆえの特色が見て取れる。その内容は学生たちでも読めばそれなりに想像はし得るものだが、具体的に理解するには実際の乳児の姿を見たり、直接的に関わったりする体験が無ければ難しいことである。

現代の少子社会においては、保育者を目指す学生といえども、実際に乳幼児と接した機会や経験がほとんど無いケースも少なくない。「子どもはかわいい」、「子どもが好き」といった感情が保育者を志す基本になっていることは事実だが、実際に短大に入学前の時点で乳幼児との関わりの頻度について尋ねると、多くが中学校や高校での職場体験実習で数日、保育園や幼稚園に行った際に子どもたちと関わりを持った、一緒に遊んだという程度に留まっている。またそれさえ無い学生もいる。更には、幼児の姿はイメージができて、0・1・2歳児の具体的な姿については、ほとんどの学生が漠然としたイメージしか持っていない。

実際に乳幼児と接した経験が無い学生にとっては、実習による体験学習の場がますます重要になってくる。基礎理論を学んで実習に臨み、実習で学んだことが基礎的な理論学習を確実にするというように、理論と実践が一体となった形で「乳児保育」が履修されることが望ましい。乳児保育を学ぶということは、乳幼児に関する基礎的な知識が単なる知識の習得に留まらず、具体的なイメージを伴って理解できることが大切である。自分自身が保育士として保育にあたる時、学んだ

ことをどのように実践に生かすのかを常に意識した主体的な学習の姿勢が求められる。

2. 目 的

上述したように、理論と実践の統合が必要な乳児保育において、保育実習の意義と目的は非常に大きいといえる。保育士資格と幼稚園教諭免許を同時に取得する場合は、実習の回数も増えるが、3歳未満の低年齢児と直接的に関われる機会があるのは保育実習の場である。そこで本研究では、保育士養成課程の学生が参加する保育実習において、どの程度、またどのような乳児保育に関する体験ができてきているのか、その実態を明らかにすることを第一の目的とした。

今回は保育実習Ⅰをその対象とし、体験の内容について具体化し、またそうした体験から得られた学生個々の気づきについて、特に大変だと感じた内容についての分析及び検討を行うこととした。そこから、実習体験を生かした授業の展開に向けての示唆を得たいと考えた。

3. 方 法

1) 調査対象者：

群馬県内女子短期大学保育学科2年生の保育実習Ⅰ参加者188名。

対象者は全て1年次の後期に「乳児保育論」（講義形式・2単位）を受講済みである。2年次の前期に「乳児保育演習Ⅰ」（演習形式・1単位）、後期に「乳児保育演習Ⅱ」（演習形式・1単位）を受講する予定となっていた。（調査対象短大の平成20年度入学生用教育課程による）。

2) 調査時期：

平成21年4月中旬に保育実習に関する質問紙を調査対象学生一人一人に配布。その際、記述方法の説明を行った。自宅等で保育実習日誌を見て確

認しながら正確に記述をしてもらい、配布日より1週間後に提出してもらう形をとった。

保育実習Ⅰの実習期間が学生たちにとっては冬休み中の平成21年2月9日から21日までの間（約2週間）であったため、実習を終えて2年次に進級した4月の時期に調査を実施することとした。また、早期にその結果をまとめ、引き続き履修する乳児保育演習Ⅰの授業に有効的に反映させることを試みた。

3) 調査内容・項目：

質問紙には、(1) 実習先の園情報（各クラスの人数や園の定員数、実際の在園児数など）、(2) 実習生としての一日毎の実習状況について（どのクラスに入り、どのようなことをしたのか）、(3) 0歳から2歳児のクラスで実際に体験したことについて、(4) 部分実習や責任実習の有無や行った内容について、(5) 0歳から2歳児のクラスで保育士が行っていた手遊びや絵本・歌など、また室内遊具や玩具の種類について、(6) 実際に乳児保育を体験して困惑したことや大変だったことについて、(7) 実習に行く前に持っていた乳児に対するイメージと実習後のイメージの変化について、(8) 今後更に乳児について授業の中で学びたいことや身につけたいことについて、などを問う質問項目を含んだ。本稿では、上記の(3)と(6)の部分を中心に分析を行うこととする。

(3) についての詳細は以下の通りである。

実習中、0歳から2歳児のクラスで「実際に体験したこと」について、具体的な30項目を示し、その中であてはまる項目全てに○をつけてもらった。但し、最後の項目1つだけは(㊸その他)、該当する場合、別途記述してもらうことにした。学生によって捉え方の違いや誤解が生じたりしないように、質問紙配布時に各項目に沿っての説明を口頭でも行った。

- ① 調乳（ミルク作り）
- ② 授乳（粉ミルク）
- ③ 授乳（解凍母乳）
- ④ 哺乳瓶での水分補給（お茶など）
- ⑤ 離乳食の食事補助
- ⑥ おむつ替え（テープ式の紙おむつ）
- ⑦ おむつ替え（パンツ式の紙おむつ）
- ⑧ おむつ替え（布おむつ）
- ⑨ オマルで排泄の補助
- ⑩ トイレで排泄の補助（おしりを拭くなど）
- ⑪ 保護者から預かった薬を飲ませる
- ⑫ ケガの手当て
- ⑬ 検温
- ⑭ 身体測定
- ⑮ 顔の清拭
- ⑯ 体の清拭
- ⑰ 沐浴
- ⑱ 着替え
- ⑲ まだ首がすわっていない赤ちゃんの抱っこ
- ⑳ おんぶひもを使って赤ちゃんをおんぶ
- ㉑ 寝かしつけ
- ㉒ 一緒に室内遊び
- ㉓ 一緒に園庭遊び
- ㉔ 園外への散歩に同行
- ㉕（自分が主で行う）手遊び
- ㉖（自分が主で行う）読み聞かせ
- ㉗（自分が主で行う）紙芝居
- ㉘ 保護者からの連絡帳を見せてもらった
- ㉙ 保護者と接した（送迎時の会話など）
- ㉚ その他（その内容を記述する）

(6) については、実際に乳児保育（0歳から2歳児の保育）を体験して、「困惑したことや大変だったこと」について、5つまで記述してもらい、その内容をKJ法（川喜田二郎氏考案）に準じて分析し、カテゴリー分けを行うこととした。

4. 結果と考察

質問紙の回収率は約94%で、188名中177名からの回答を得た。実習園は述べ151園であった。

有効回答数177名の内、実習中に0歳から2歳児までの乳児と全く関わりを持たなかった学生が3名おり、1名は実習期間を通して4歳児（年中）クラスに、もう1名は前半の1週間は5歳児（年長）クラスで後半の1週間は4歳児（年中）クラス、他1名は実習期間を通して5歳児（年長）クラスで実習を行うという状況であった。本人たちに確認したところ、こういった配置は希望したものではなく、できれば3歳未満児のクラスも経験してみたかったというのが聞き取りから得られた結果である。

逆に実習期間中、ずっと3歳未満児のクラスに入り、3歳以上児のクラスでは実習を行わなかった学生が9名いた。その理由は、実習園自体が3歳未満児のみの入所施設であったこと、また他には学生自らが3歳未満児のクラスを見たいと園側に要望し、その希望が聞き入れられた配置となったためということが確認できている。

2週間の保育実習Ⅰの期間中、実際に保育所に行った延べ日数が11日間だった学生が144名で、土曜保育等の関係で延べ12日間であった学生は32名、体調不良が理由で途中までしか実習に行けなかった学生が1名いた。

その内、

0歳児クラス経験者は…164名

体験日数の平均……………1.6日

1歳児クラス経験者は…168名

体験日数の平均……………1.8日

2歳児クラス経験者は…167名

体験日数の平均……………2.2日

であった。

限られた実習期間内で、0歳から6歳までの子どもの様子を実際に見て体験するという学びは大

きいが、各クラスに入れる日数や時間には制約がある。その中で、実際に乳児と関わる体験は非常に貴重であるものの、時間的には決して十分とはいえない現状が見て取れる。

実習中に0歳から2歳児のクラスで実習生が「実際に体験したこと」について、回答が多い順にまとめた結果は表1の通りである。

表1 乳児保育に関する体験 N=177人

項目番号	体験項目	人数(人)	割合(%)
22	一緒に室内遊び	169	95.5
21	寝かしつけ	167	94.4
23	一緒に園庭遊び	163	92.1
18	着替え	156	88.1
7	おむつ替え(紙のパンツ式)	135	76.3
26	読み聞かせ	122	68.9
25	手遊び	118	66.7
27	紙芝居	112	63.3
24	園外散歩	92	52.0
5	離乳食の食事補助	85	48.0
10	トイレで排泄の補助	75	42.4
6	おむつ替え(紙のテープ式)	72	40.7
15	顔の清拭	59	33.3
29	保護者とのかかわり	56	31.6
28	連絡帳	41	23.2
9	オマルで排泄の補助	38	21.5
13	検温	38	21.5
14	身体測定	33	18.6
2	授乳(粉ミルク)	24	13.6
4	哺乳瓶での水分補給	18	10.2
8	おむつ替え(布おむつ)	18	10.2
20	おんぶひも	12	6.8
12	ケガの手当て	9	5.1
30	その他	9	5.1
19	横抱っこ	6	3.4
1	調乳	5	2.8
16	体の清拭	4	2.3
11	与薬	2	1.1
3	授乳(解凍母乳)	0	0
17	沐浴	0	0

3歳未満児のクラスに入った学生の90%以上が子どもたちと室内もしくは園庭において「遊び」を通しての関わりがあったことが明らかとなった。子どもの遊びは成長過程によっても大きく変化するため、例えば社会的行動の確立の面から遊びを捉えたパーテンの傍観者遊び、並行遊び、連合遊び、協同遊びへの変化といった考え方についても、実際の子どもの遊びの様子を観察できるとその理解に繋がっていく。保育所保育において、遊びは保障されるべき子どもの重要な活動であり、特に低年齢児の遊びの特徴についても何らかの気づきがあったのではないかと推察できる。

また、遊び場面に匹敵して多かったのが、主に午睡時の「寝かしつけ」であった。0歳児については昼寝の回数は1回とは限らず、月齢が低いうちは午前の登園後から眠りにつくことも考えられる。一人一人の生活リズムに応じた睡眠の保障も重要なことであり、そのための環境的配慮も必要になる。3歳未満児は午睡の時間が設けられているが、集団生活における午睡の難しさ、寝かしつけのあり方についてなど、実際に体験して感じるものがあつたのではないだろうか。

学生たちが実習前、1年次に履修した乳児保育論においても理論の学習に留まらず、乳児の保育に関する演習的な体験学習の機会も可能な限り取り入れてきた。おむつ替えや着替え、調乳や授乳、おんぶひも、清拭や沐浴などがその一部である。しかし、附属の保育施設をもたない短大の保育士養成課程における通常の授業においては、せめて乳児の沐浴人形を使つての模擬体験を行うことくらいしか実際にはできない。動くことのない、じっとしている人形で着替えの練習やおむつ替えを行っているため、実習を通して、約88%の学生が実際に子どもたちの着替えの援助を、そして約76%の学生がおむつ替え(パンツ式の紙おむつ)の経験をしたことは意味が深い。実習時の入所乳児の月齢にもよるところが大きいのと考えるが、テープ式の紙おむつの交換(約40%)や授乳(約

13%)、となると体験できた学生は少なくなっている。調乳ともなると、177名中わずか5名しか経験できていない。調乳自体は授業の中でも体験可能であるため、演習授業において十分に指導を行っていく必要があると認識できたものの、その子どもに合った安定した抱き方で、目を見て優しく語りかけながらの授乳や哺乳瓶の傾け具合、授乳後の排気のさせ方などは、実際にやってみて感覚が得られるものである。

園や家庭の方針により、あるいは紙おむつの圧倒の普及からか、布おむつを使っている乳児自体が少ないため、布おむつの交換ができた学生も約10%に留まった。乳児期のおむつ替えは1日に何度も行うため、布おむつの折り方やあて方など、短い期間であっても実際に体験した学生は大分手つきが慣れたようである。排泄物がおむつからもれないようにする折り方の工夫やおむつカバーのきつきなど、細かいことまで会得した。

1・2歳児クラスに入った学生はトイレでの排泄の補助も体験している(約42%)。おむつが取れてトイレで排泄することへ移行していくこの時期、そのこと一つをとっても子どもの成長や個人差が感じられる体験となったのではなかろうか。

今回の実習が冬の2月という時期も関係していると考えられるが、沐浴に関しては体験率0%であった。演習授業で行う沐浴体験が逆に貴重な機会となっていることも確認した。

これらの結果を踏まえると、実際の保育実習においても決して多くのことが体験できているわけではないことがわかる。体験のできなかった、あるいは少なかった項目については、演習授業においてしっかりとフォローして、保育現場に出た際に役立つ実践力を養っておく必要性が見出された。

また、60%以上の学生が3歳未満児のクラスで手遊びをしたり、絵本や紙芝居を読むといった部分的な実習で主体的に活動していることもわかった。このことから低年齢児に読み聞かせをする

際の配慮事項やポイントをおさえた準備が事前に求められることもこれから実習を迎える学生たちに伝えることができる点だろう。

次に、実際に乳児保育(0歳から2歳児の保育)を体験して、学生が「困惑したことや大変だったこと」について記述した内容の分類については表2の通りである。

質問紙を提出した177名の内、0歳から2歳児のクラスで実習をしていない学生が3名いるため、有効回答数はその3名を除く174名であった。174名からの(6)に対する回答は合計743件にのぼり、一人当たり平均で4.3件の記述をしていることになる。大変だったと思うことを5つまで、特になければ記述しなくてよいという事前説明を行っていたので、この4.3件という数字は、ほとんどの学生が何らかの困惑を実習中に感じた結果と捉えることができる。

174名中、104名が指摘したのが乳児とのコミュニケーションのとり方、接し方の難しさである。まだ会話ができない乳児に対しての言葉かけに戸惑う学生も多く、言葉かけ・語りかけ・声かけ(これらの表記は学生の記述表現に準じている)・説明の仕方等でどうしたらいいのか、0・1歳児クラスで特に困惑していることがわかった。実習生の思いを伝えることも、また乳児の気持ちを感じ取ることも非常に難しく、共感関係が形成されないがゆえのもどかしさを体験したようである。言葉がいかに大切かを再認識しつつ、乳児の言葉以外の表現を受け止める感受性の必要性についても考える機会となったであろう。「子どもの方から話しかけたり訴えたりしてくるが、言葉がわからない」「何を伝えたいかわからない」から、「何をしたらいいのかかわからない」ということになる。しかし、毎日保育所生活を共に送っている子どもにとっての特定の保育士ならば、同じような状況でも子どもの気持ちを感じ取り、また子どもの言葉にならない言葉の意味も読み取ることができるのであろう。それは決して容易なことではな

表2 乳児保育において大変だったこと

上位カテゴリー	下位カテゴリー	記述内容 () 内の数字は同じ内容の記述が複数あった際の数
子どもとの関わり 272	コミュニケーション (104)	コミュニケーションのとり方、接し方 (65) 話しかけたり訴えたりしてくるが、言葉が分からない (19) 会話が難しい (6) 何を伝えたいのかわからない (5) 複数が同時に話しかけてくる (2) 障害のある子どもとの関わり方 (2) 他文化背景の子どもとの関わり方 言葉以外のコミュニケーション 新入園児 (途中入所児) との関わり方 積極的な子もいればおとなしい子もいて関わり方が難しい 子どもから、「～して」と言われたとき
	対応 (14)	言うことを聞いてくれない (5) 子どもたちをまとめること (2) 並んで欲しいのに並んでくれない (2) いすに座って欲しいのに座ってくれない 部屋に戻って欲しいのに戻ってくれない 遊びをやめておもちゃの片付けをしてくれない すぐに先生のところに行ってしまう 手をひっぱられ色々なところへ行きたい、興味が多い
	言葉かけ・語りかけ (49)	食事の際 (4)、楽しく食べられるような言葉かけ 排泄の際 (4)、「すっきりしたね」などの言葉かけが出来なかった 言葉かけの仕方 (20) まだ会話ができない赤ちゃんに対する言葉かけ (15) 0・1歳児に対して (2) 自分で何でもやりたがるがうまくできない子どもに対する言葉かけ こちらから積極的に話しかけなくてはならないこと 一日中言葉かけをしていること まだ名前を覚えていないときの言葉かけ
	声かけ (9)	子どものひきつけ方 (4) 子どもたちに何かをして欲しいとき (2) 全体に対する声かけの仕方 (2) 新しいクラスに入ったときの最初の声かけ
	説明 (5)	説明の仕方 (分かりやすい言葉の言い回し) (3) ゲームのルール説明 製作時の説明の仕方
	泣き・ぐずり (32)	赤ちゃんが泣いているときのあやし方、対応 (12) なぜ泣いているのか理由が分からないとき (11) 朝泣いて登園してきた子どもがなかなか泣き止まないとき (3) 「ママー」と言って泣いてしまう子ども (3) 実習生がしたことに納得がいかず「いやだ」と泣き出してしまった 担任の先生が見えなくなると泣き出してしまう いつも近くにいないとぐずり、追いかけてくる
	人見知り (59)	泣かれてしまったとき (30) 人見知りする子との関わり方 (14) 人見知りされてしまった (7) さけられてしまった (5) なついてくれなかった (2) 反応が無いこと
対応	けんか・トラブル (64)	友達のおもちゃや物の取り合い (24)、そんなときの言葉かけ 対処、対応の仕方 (21) 仲裁の仕方 (7) 解決をすること (2) 実習生の取り合い (2) 友達に手を上げてしまう子どもへの対応 (4)、目が離せない 友達に噛みついてしまう子どもへの対応 (2) 月齢の大きい子が小さい子の髪をひっぱったりする いきなり噛まれた
	叱り方・注意 (11)	どこまで注意するか、どう注意したらよいか (2) 注意しても言うことを聞かない子ども (2) いけないことをしているとき (2) ふざけているとき、騒いでしまうとき たたく、けるなどをされたとき 物などを独り占めしたとき 常にたたいてくる1歳児に少し注意をしたら「嫌いだ」と言われ続けた 叱った後のフォローの仕方 (特に記述なし5)

上位カテゴリー	下位カテゴリー	記述内容 ()内の数字は同じ内容の記述が複数あった際の数
	安全 (16)	危険のないように常に配慮すること (4)、危険を察知すること 危ないことをどう教えたらいのか (3) 園庭での遊びの際の安全確保 (2) ちょちょこと動き、ぶつかったり、ケガをしないか心配 (2) 行動が早く、予測不可能 (2) ころんだり、ぶつかったりしたとき 遊具でケガをしてしまったとき 外遊びの際、砂を食べてしまった
保育の内容	抱っこ (8)	抱っこから下ろすと泣いてしまう (5)、なかなか離れない 抱っこの仕方 抱っこをせがむ子に集団生活をさせなければならないとき 1歳児をずっと抱っこしていたら腕がしびれた
	おんぶ (3)	おんぶひもでのおんぶの仕方と下ろし方 (3)
	寝かしつけ (51)	午睡で子どもがなかなか眠れないとき (38) 大人数同時の寝かしつけ、添い寝 人見知りの赤ちゃんの寝かしつけ 睡眠ノートの記入 (特に記述なし10)
	おむつ替え (80)	じっとしていない、動き回っている子どものおむつ替え (15) おむつを替えるタイミングがわからない (7) おむつ替えを嫌がる子ども (6) テープ式のおむつ替え (5)、きつき 紙パンツをスムーズにはかせること (5) 泣いている赤ちゃんのおむつ替え (4) 人見知りの赤ちゃんのおむつ替え (2) 大便のとき (2) 素早くできない (2) 布おむつの仕方 おしりの拭き方 替えている最中のおもらし 子どもによって紙や布の種類が違うこと (特に記述なし28)
	トイレ (17)	どこまで援助していいか (5) トイレを嫌がる子ども (5) トイレトレーニングの仕方 (3) 誘導の仕方 (2) 人数が多いとき もらしてしまったとき
	着替え (29)	じっとしていない赤ちゃんの着替え (5) 着替えのさせ方 (4) 着替えを嫌がる子ども (4) 途中で逃げてしまう (4) 人見知りの赤ちゃんの着替え (3) 自分でできる子どもに対する促し方 どの程度援助していいのか 泣いている子どもの着替え 靴下を履きたがらない子ども パジャマの着脱 (特に記述なし4)
	授乳 (7)	ミルクをあげること なかなか飲んでくれなかった 授乳後の排気がうまくできなかった 排気の際の抱っこの仕方 人見知りの赤ちゃんへの授乳 調乳 (特に記述なし1)
	食事補助 (90)	嫌いなものを食べない (15)、好き嫌い ご飯を嫌がり食べない (14)、そんなときの言葉かけ 食事がなかなか進まない子 (7)、ごちそうさまのタイミング どの程度援助していいのか (5) じっとしていない赤ちゃんに食べさせるとき (4) いすから降りてしまう (2) 人見知りの赤ちゃんにご飯をあげるとき (2) 食べながら寝てしまう赤ちゃん おしゃべりばかりしてしまう子ども 遊び食べになってしまったとき スプーンの練習をしていても手づかみ食べをしてしまう

上位カテゴリー	下位カテゴリー	記述内容 () 内の数字は同じ内容の記述が複数あった際の数
		こぼしてしまう、口から出してしまう お箸の持ち方を教えること もっと食べたがる子どもに対して 同時に複数の赤ちゃんに離乳食をあげるとき テレビに気が行ってしまい、おやつが進まない子ども 食後、顔を拭くの嫌がった 食べこぼしの掃除 (特に記述なし30)
	歯磨き (2)	歯磨きの仕方 歯ブラシをなかなか離さない子ども
	検温 (5)	じっとしていない子どもの検温 (2) 人見知りの赤ちゃんがなかなか計らせてくれなかった 検温を嫌がって逃げたり泣く子ども (特に記述なし1)
	身体測定 (1)	(特に記述なし1)
保育の技術	手遊び (6)	年齢に合わせた手遊び (3) 集中してもらうこと (2) (特に記述なし1)
	オルガン・ピアノ (1)	新しい歌を教えること
	絵本・紙芝居 (17)	読み聞かせ方 (5) 導入の仕方 (4) 大人数に対する読み聞かせ (3) 読むペース (速くなってしまう) (2) 集中のさせ方 (2) 読み終わった後のまとめ方
	遊び (17)	自由遊びの際の関わり方 (3) 赤ちゃんとの遊び方 (3) 同じ子どもばかりと遊んでしまう (3) 一人遊びが多く、どう関わったらよいか (1歳児) (2) 遊びの展開の仕方 (2) 複数から同時に遊びを誘われたとき 遊びが続かない まだ遊びたいとぐずる 戦いごっこがエスカレートしたとき
	散歩 (8)	散歩時、その場から動かなくなってしまったとき 色々なところへ行ってしまったとき 子どもの様子を見ながら歩くこと 誘導 安全確保 (特に記述なし3)
その他	援助全般 (35)	どこまで手をかかしていいかの判断 (18)、必要以上に援助をしすぎない 発達による違いや個人差の大きさ (5)、見分け方 やって欲しいこと、援助のタイミングや仕方がわからない (4) 一人一人のリズムに合わせる 次の行動へとスムーズに移すこと 短い間に名前を覚えること 生活習慣を教えること 常に全員を見ること 子どもがどこにいるのか把握すること 落ち着きがない子への対応、すぐにどこかに行ってしまう (2) 保護者に連絡すること
	配慮 (1)	アトピーの子に対する配慮
	保育士 (2)	食事場面での保育士の行動に戸惑い 先生とのコミュニケーションが難しい

いが、子どもと保育者との応答的な関わりを身近に見ることで、学生も何が大切なのかを心で感じ取ることができるのではないだろうか。

また乳児の泣きに対する戸惑いも多く目立つた。泣いているときのあやし方、対応、理由につ

いて、また実習生自身が乳児の泣きの一因になっているケースなどもあり、「泣かれて困った」「どうしていいかわからなかった」まま、実習を終えてしまった学生も多い。「コミュニケーション」「対応」「言葉かけ・語りかけ」「声かけ」「説明」「泣

き・ぐずり」「人見知り」、以上の下位カテゴリーに分類された内容を総合して、上位カテゴリー「子どもとの関わり」についての記述は合計272件と非常に多く、人見知りの原理や泣くという表現にある乳児の気持ちや状態など、心理的な解釈からの乳児理解に関する説明も引き続き授業で行っていく必要があると強く感じた。

また、言葉の発達にも関連しているが、友達のおもちゃの取り合いや、手をあげてしまったり、噛みつきに関する記述も多く見られ、そのような場面でどのように対応したらよいのか、また言葉かけの仕方などでも苦労したようである。

乳児の行動は思いもよらない方向に急に展開することもあるため、安全面の確保及び危ないことをしたときの注意の仕方についても気をつけている様子が伺える。

「保育の内容」についても食事の援助で苦労した点、特に「食事がなかなか進まない」「食べない」「好き嫌いがある」といった内容が細かくあげられている。どうしても食べさせないといけないという焦りさえ感じているようだ。食事が楽しく進められるような言葉かけの必要性についても記述が見られた。

おむつ替えについても、着替えについても、そしてもちろん食事の場面でも、なかなか思うように子どもたちは「じっとしていてくれない」から実習生にとっては援助が大変になっているようである。このあたりは、教室で行う乳児の人形を使っている模擬体験からは想像できなかった現実を理解したのであろう。

「子どもを寝かしつけることが本当に大変だった」と記述した学生は、その状況を以下のように補足説明している。

『0・1歳児34名の午睡、お昼寝のときの背中トントンの量……、子どもの人数が多いので子どもの左右からとかではなく腕を伸ばして4、5人にトントンして寝つかせ、寝ついたら、自分が移動して、また違う所でトントンしていた

こと。子どもが寝やすいリズムをうってあげることも勉強になりました』

他にも「0・1歳児のトイレ、お着替え補助、支援」について、

『時間差でトイレへ誘導するものの、やはり34名と人数も多いので、流れをスムーズに考慮しつつもトイレの時間の補助、おむつ替え、ズボンをはくときの洋服の名前チェックしながらの支援やほめながら自立を促す支援を同時に行うなど、いろいろな所にアンテナを集中して張らせることが大変でした』

と述べている。

この感想にもあるように、子どもの保育を行うことは、一つの行動に限られるわけではない。また、これが正しい、というやり方が決まっているものでもなく、基本的な理論をもとにして保育者が子どもとともに創り出していくものである。そしてそれは一人で行うことではなく、保育者たちのチームワークによりそれぞれの特性を活かしながら全体としての力を発揮するのであろう。

保育を進めるうえでの柔軟性は、基礎理論をよく理解したうえで、実習の場で示される保育者の保育の進め方をよく学ぶことで身につけられるのかもしれない。今回、多くのことに困惑し、大変だったという経験は非常に意味のあることで、そのことに対し、一つの答えを求めるのではなく、広い角度から物事を捉える視点の必要性を学生が感じたならば、それは大きな糧を得たといえよう。

5. おわりに

保育実習は乳幼児と直接関わりを持てる貴重な機会であるが、実習期間や時間等の制約も大きく、それだけで十分な実体験ができていないわけではない。しかし、短期大学の保育士養成課程においては、高校を卒業後わずか2年で保育の現場に出て、子どもたちからは「先生」と呼ばれる立場になり、大切な子どもたちの命にさえ関わる責任のある仕

事であることはいうまでもない。前述の乳児保育に関する配慮事項や3歳未満児の保育に関する配慮事項からも、特に養護的側面の重要性が理解できる。

養成校の授業においては、「乳児保育」の講義及び演習に限らず、例えば「保育原理」「小児栄養」「小児保健」「発達心理」「幼児文化」といった他の関連科目との連携が不可欠である。様々な方向から総合的な子ども理解がなされるよう、授業担当者間の授業内容等に関する情報交換をはじめとする日頃からの連携について積極的に取り組む必要があると再認識した。

学生の学力低下や生活体験の乏しさ、外遊び体験の減少等、マイナス要素は数多く挙げられるが、先にも述べたように、保育士の資質はこれまで以上に高い要素が求められている。教室と保育室とを繋ぐ、養成校と保育現場を繋ぐ役割は養成校の教員に課せられた使命でもある。様々な授業の中で「実習前指導」及び「実習後指導」のような内容が含まれることで、学生の実習体験学習が理論と実践の統合に向けて更に深い意味を持つようになるのではないだろうか。

保幼小の連携の必要性が強調され、そして幼稚園教育要領の改訂に伴って行われた今回の保育所保育指針の告示化からも明らかなのは、子どもの育ちや学びは連続しているということである。発達過程においても「おおむね」という表記が付けられたのは、一人の子どもが必ずその月齢や年齢に見合う発達をするわけではなく、区別の違いを速い・遅いの尺度とせず、発達のプロセスそのものを重要に捉えることを強調している。保育所での生活や遊びの発達は小学校の生活や遊びにも繋がっていくのである。また「おおむね」と同様に、学校教育法第22条に示されている「適当な」環境という表現についても、柔軟性や場に応じた的確

な対応など、保育者個々の創意工夫が求められていることがわかる。保育士の自己の保育に対する反省・評価、そして研修等を通しての自己研鑽が専門性を向上させることになる。子どもの育ち・学びが連続性を持つように、保育学生の育ち・学びも授業・実習、そして保育士として現場に出ても先、連続している。養成課程における一つの授業であっても断片的に捉えるのではなく、学びの連続の一環としての視点で展開していくことが重要であると本研究からの示唆を得た。従って、実習を終えて2年次に進級してからの乳児保育演習の授業では、実習中に学生が体験したことの情報交換の場を設けたり、大変だった、困ったことについて振り返る時間を設けるなど、具体的な対応についても学生間で話し合うことを行った。更に必要な助言等は授業の中で事例を基に付け加えることにした。実習前と後では、学ぶ学生の姿勢も違うように感じられ、なぜ学校で保育の理論を学習する必要があるのか、その意味を見出したようである。

今回は保育実習Ⅰのみをその対象としたため、その後行われる保育実習Ⅱ及びⅢでの体験内容については、今後追跡調査ならびに分析を行っていきたいと考えている。また、幼稚園での教育実習も含めて、総合的な実習による体験学習を通しての乳児理解・子ども理解についても探っていききたい。

参考文献

- 岡田正章・千羽喜代子他編（1997）現代保育用語辞典、フレーベル館
- CHS 子育て文化研究所編（2009）見る・考える・創り出す乳児保育、萌文書林
- 日本保育学会第61回大会論文集（2008）
- 日本保育学会第62回大会論文集（2009）
- 保育所保育指針（平成21年4月施行）
- 保育所保育指針解説

〔2009年11月13日 受付〕
〔2009年12月19日 受理〕